

まち・人とながり 進化し続

総合デザインと初代館長を務めた
宮崎吾朗さんに聞きました！

まちの“余白”をこれからも大切に



ジブリ美術館を創る際に私が担ったのは、当時の館主・宮崎駿が考えた理想の美術館を、現実の建築や空間、意匠に落とし込み、実現させる仕事です。そこには法律や施工上のさまざまな制約がありますが、創造性でより良い形にして制約を乗り越える過程は面白くもありました。例えば、入り口から階段で地下へ向かうアプローチは、建物の高さ制限があったから生まれたアイデアです。試行錯誤を重ねた美術館がオープンし、お客さまが喜ぶ笑顔を見るのは、うれしいことでした。ただ、創る人間というのは次の創作に気が向きがちで、美術館を維持・運営する館長の仕事は、私には向いていないな…とも思っていました(笑)。

今は東京がどんどん都市化・過密化して、三鷹もまた例外ではありません。それでも、三鷹駅からジブリ美術館へ向かう「風の散歩道」などの景観は、開館時の25年前とそう大きく変わっていない。まちの中に緑や自然が残る、いい意味での“余白”があることは三鷹の良さであり、大切なことだと思います。これからもジブリ美術館が、緑や水辺など環境的な余裕を保ったまちの中にある、小さな美術館であり続けられたら幸せだと思っています。

迷い込んで楽しむ 不思議の世界

美術館のキャッチコピーは「迷子になろうよ、いっしょに。」。迷路のような建物に順路はなく、来館者は目線の高さや時間の経過などにより異なった表情を見せるしつらえや、館内の至る所にちりばめられた面白い仕掛けを見つけながら、自由に巡り歩きます。

どんなものを見つけて、何を感じるかは、その時、その人次第。観る人に委ねられた展示や空間は、いくつになっても、何度訪れても、

また新たな発見をもたらしてくれます。



公園の緑に包まれた美術館

開館当初は井の頭恩賜公園の緑の中にある色鮮やかな外観が特徴的でしたが、時を経て、植栽の変化や周りの植物との調和で趣ある雰囲気。緑と建物が融け合う、ここにしかない景観を形作っています。



エンブレムに描かれた三鷹

美術館のエンブレムに描かれているのは、三羽の鷹(三鷹)、イノシシの頭に「イ」の字(井の頭恩賜公園)、大きな木の下へのトトロ(ジブリ)。三鷹感満載の言葉遊びをモチーフにしたこのデザインは、海外の紋章や旗が好きな宮崎駿監督が、設立の際に自らスケッチを描き、考案しました。



地域とともにまちを盛り上げる！

今年も10月18日(日)に井の頭恩賜公園で開催される「三鷹の森フェスティバル」(美術館共催)は25年前の開館を記念して始まった音楽フェスティバルです(16面参照)。美術館スタッフおすすめの映画を上映する「三鷹の森アニメフェスタ」(2027年3月上旬開催予定)の「アニメーション古今東西」などのイベントも、市と美術館が協力して開催しています。そのほか、三鷹阿波おどりや三鷹市民駅伝大会などのイベントに美術館スタッフも参加しています。



三鷹の森フェスティバル 撮影：まちなかカメラマン 柴平達弥